# 八王子市立弐分方小学校におけるアクティブ・ラーニングの実践―算数の授業と特別活動を題材として―

加藤　誠之[1)]，坂本　貴一[2)]
1）高知大学教育学部
2）横浜市立六つ川台小学校

# Document：Practice of Special Activities in Hachioji Municipal Nibukata Elementary School

Kato Masayuki[1)], Sakamoto Kiichi[2)]

1)Faculty of Education, Kochi University
2)Yokohama Municipal Mutsukawadai Elementary School

要約

今日の学校教育では教科教育の分野だけでなく，生徒指導・特別活動の分野でも児童・生徒の能動的・相互的な活動を重視するアクティブ・ラーニングの重要性が指摘されている。筆者らは2017年9月20日（水），特別活動の分野におけるアクティブ・ラーニングの実践で知られる八王子市立弐分方小学校（清水　弘美校長（当時））を訪問し，同校の実践を見学させていただいた。本稿はその際に撮影したVTR,作成したメモ等によって再構成した同校の実践の記録である。

キーワード：特別活動，小学校，アクティブ・ラーニング

## 1. 目的

清水校長は，2017年に刊行した著書で以下のとおり述べている[1]。

特活[=特別活動]は，自分から進んで動くこと，他の人と協力すること，最後までやりきること，自分らしく行動すること，やさしくすること、そういう価値に気付いて自分の生活に取り込んでいく方法を学ぶ時間なのです。そんなすごい教育活動だからこそ，学校生活の半分近い時間を使って指導されています / 特活は，今自分がいる社会をもっとよいものにしていく活動です。そのことを，一人でも多くの人に知ってもらいたい，その価値を理解してもらいたい，さらに教師なら指導できるようになってもらいたい，という思いでペンをとりました。

今日の学校教育では，教科教育の分野でも，児童・生徒の能動的・相互的な活動を重視するアクティブ・ラーニングの重要性が指摘されている。このことに鑑みれば，清水校長の提唱する特別活動の方針は，教科教育も含めた今後の学校教育の在り方を考えていく上で重要である。そこで，筆者らは2017年9月20日（水）に弐分方小学校を訪問

し，同校の実践を見学させていただいた。本稿は，この実践に関する記録である。

## 2. 方法

本稿は，弐分方小学校を見学させていただいた際に撮影した VTR, 作成したメモ等によって再構成した記録である。同校で実際に見学させていただいたのは，同校の算数科の授業，学級会，運動会の練習，委員会活動及び縦割り班である。

## 3. 結果

### (1) 算数科の授業

授業開始時間と同時に授業が始まった。教師が黒板に，100 マスの模造紙のマス目に 1 から 100 の数字が書かれているものを貼った。その上に，4 マス分と 9 マス分の穴が開いた正方形の画用紙を取り出し，4 マス分の穴が開いた模造紙の上にかざした。

そのときに，児童は「何が始まるんだろう」と関心を示した。そこで，教師が「今から先生が穴に書かれている数字の和を暗算して答えを黒板に裏にして貼ります。電卓で計算の答えを出してもらえる人？」と児童に呼びかけ，教師の暗算と児童の電卓の計算勝負を行った。そのとき，教師の暗算の仕方を見つめている児童，電卓の計算を見守る児童，児童自身も計算の上部に参加している児童，両者のどちらが早く終わるのかを見ている児童がいたが，反応を示さない児童はいなかった。教師の暗算力の高さに「先生，すごい」と声に出す児童がいた。

そこで, 9 マスの穴が開いた画用紙でさらに暗算勝負をした。「電卓の係をまた誰かお願いします」と教師が言うと，挙手しながら「ぼくもやりたい」，「私もやりたい」という声が飛び交った。この過程を繰り返すうちに教師がどのような計算の仕方をしているのかを児童の一部は疑問に思い，声に出す児童が増えた。続いて学習課題を把握させるために，式が書かれた模造紙を提示した。すると，半数以上の児童が「1 たす 2 たす 3 たすは 6 で 4 たして…」と声を出して計算しだした。そこで，教師が「もう計算しだしているね」といった。すると，児童のほとんどが計算をはじめ，答えが出ている児童もいた。続いて，「今皆さんは，前から順番にたしていったけど，それだといつまで経っても機械には勝てないよね。じゃあ機械に勝つためにはどうしたらいいかな」と言った。

そこで出した指示が，ノートに自分の計算の仕方が誰にでもわかるように書くことだった。児童の半数は，自分の考えを式と言葉で書いたり，文章でまとめたりしていた。残りの半数の児童は，何を書けばいいのか戸惑っていた。教師は，その児童を黒板の前に集め，座らせた。指導案に書かれているように，考える手順を説明した。特に，まとまりという言葉を使って「数の組み合わせを考えてみると, 同じ数のまとまりが見えてくるんだよ」と説明していた。すると，自席に着いてから，ノートに自分の考えを書き始める様子が見受けられた。

展開では，工夫の方法の検討，活用が行われた。工夫方法の検討では，始めに答えを確認してから，工夫したやり方を発言するようにした。児童の中からは 10 の塊を作る方法や逆からさらにたして 11 の塊を作って 2 でわるやり方は出たものの，11 の塊を 5 つつくる方法は児童の中からは出てこなかった。また，一部の児童は，前から指揮の順番にたす方法以外思いつかなかった。しかし，他の方法のヒントが意見を共有しているうちに見えてくると，算数が得意ではない児童が全体に出て発言する場面があった。発言は途中で行き詰ってしまったが，一部の児童が発言の内容を理解して発言をフォローしていた。

活用の場面では，スクリーンにカレンダーを置いて数字を並べた。その際，教師から「一番皆がやりやすい方法で計算していいですよ」と投げかけた。すると，先程まで前から順番に計算していた児童は，答えの確認のためにその方法を使っている様子があったが，その児童も工夫した計算方法で答えを導き出せていた。全体で答えを確認する場面で，先程発言がうまくできなかった児童が手を挙げた。活用の場面では学習内容をその児童が理解できるようになっていた。ノートにもしっかりと式と方法が書かれていて，その児童の発言に対して他の児童がうなずいて反応をしていた。

活用の場面を経て，「皆さん，どんな計算の仕方が一番やりやすかったですか」と問いかけ，学習の内容を振り返ら

せた。児童の反応に対して，「どの方法もいいところがあるね」と評価し，授業が終わった。

### (2) 学級会

弐分方小学校では，学級会の進め方は以下に記すとおり，学校内で統一している。これは，授業中に教師が児童に配付した資料に載っていた学級会の流れを参考に，作成したものである。

**1. 始めの言葉**
**2. 司会グループの挨拶**
**3. 議題の確認**
**4. 提案理由の確認**
**5. 気をつけることの確認**
**6. 話し合いの順序の確認**
**7. 話し合い**
**・柱①**
**・柱②**
**8. 決まったことの発表**
**9. 振り返り**
**10. 先生の話**
**11. 終わりの言葉**
**12. 学級会ノートの記入**

清水校長は，以上の手順について，「研究してこのやり方が一番良いと考えた」と述べている[2]。清水校長によれば「特活は本来，創意工夫こそが大事」であるが，教師一人ひとりの創意工夫を認めると「それぞれの教師が経験してきたいろいろな学校のやり方をもってくる」ことになり，「それではうまくいったり，いかなかったり」する[3]。そのため，弐分方小学校では「自己流禁止」にして，統一した方法で学級会を行っている[4]。

同校の学級会は，司会，副司会，板書記録，ノート記録を，学級の児童でローテーションしながら行っている。その他の児童は学級会ノートを作成しながら，学級会に参加している。教師は，話し合いの流れを観察しながら児童の反応や意見を聞いていた。できるだけ児童中心で会が進められようにする，ファシリテーターの役割を教師が担っていた。実際に見学させていただいたのは，3 年生の学級会である。コの字型の机配置で意見が共有しやすい配置にしていた。

学級会の始めに，児童一人ひとりに以下のとおり記したプリントが配付されていた。

・**議題**：クラスの旗を作ろう
・**提案理由**：運動会の“南中ソーラン”を踊るときにクラスの旗を持って出る。その時にクラスの願いを込めた旗を作りたいから。
・**柱①**：どんな願いを込めるか（**柱②**は今回の授業では取り上げなかったので省略）。

柱①では，意見を出し合う，意見を比べる，意見をまとめる，の 3 つの構成で行われた。意見を出し合うときに出たアイデアは大きく気持ちに関することとクラスのみんなに関することが挙げられた。気持ちに関しては「優しく」，「頑張る」，「諦めない」，などが挙げられ，クラスの皆に関することは，「力を合わせる」，「助け合う」，「協力」などが挙げられた。授業時間の関係で比べ合い段階に進むように教師が手を差し伸べたが，比べ合いの時間では，たくさんの意見が出て，アイデアがまとまってきた。最後にまとめる活動に入った。そこでは，教師から「何が大切な言葉

なの？どれをキーワードにするの？」と助言が出た。すると意見が最終的には「諦めない」，「協力」2 つのアイデアにまとまった。授業の最後に，司会の指示でノートに記録していた係が本授業で決まったことを発表して，教師へ引き継いだ。学級会においては児童が時間管理から構成まで分担して行われている。

### (3) 運動会の練習

弐分方小学校では，数週間後に本番を控えていた運動会の練習も見せていただいた。ここでは，6 年生の練習風景をまとめる。

6 年生は集団行動の練習中だった。その集団行動は，人文字というもので，全員で協力してタイミングを合わせて動き，完成させることが大切である。運動会の実行委員会長は演技には加わらず，児童の動きを確認し，動き出す前の呼びかけを担当していた。児童が練習するとき，教師のみならず，児童からもタイミングを取るために「1，2，3，4，5，…」と声を出して練習していた。何度か人文字の練習をした後，教師は「それぞれの場所でそれぞれの課題があると思う。だから先生が『皆でこうしなさい』という指導はあまりできない」，「それ（各々の課題）をそこにいる人と考えなさい，相談しなさい」と児童に伝えた。

すると，児童の中から「90 度に曲がるときにタイミングがずれてしまっている」と意見が出ていた。相談の後の演技は，腕を組んで始め，曲がるときに腕を一度組外し，再度組み直すという工夫により，曲がりやすくなってタイミングが遅れないように修正された。そのことを児童が言葉で共有できるように教師は「今の練習の工夫はどうだった」，「もう一度相談しよう」と児童に投げかけた。すると，「タイミングのずれは少し良くなったけど，組み直す時がまだてこずっている」という意見が多かった。そこで，肩を組むのではなく，位置を下げて，お腹の位置に手を当てるという工夫に変更していた。

### (4) 委員会活動

弐分方小学校の委員会の中には，委員会活動の時間だけではなく，休み時間を使って仕事をしている委員会がある。今回は環境美化委員会の休み時間で行われた仕事を観察した。友達と遊んでいる児童の他に委員会の仕事をしている児童たちがいた。環境美化委員会の活動が中休みの時間にあった。5，6 年生は校舎の裏に集まり，先日縦割り班で行われた運動場の石を集める活動の班ごとの結果を，集計する仕事を行っていた。6 年生を中心に 5 年生が班ごとに集計できるように協力して集計を行った。一部の班の袋には石と砂が混ざっていたが，6 年生の指示に従って石だけに分別する作業を行っていた。

### (5) 縦割り班の導入

弐分方小学校では縦割り班を導入している。イベントのためだけに集まるのではなく，日頃から異学年間交流を行っている。筆者らが訪問した際には，運動会が間近だったので，運動会の練習を縦割り班ごとに行う予定が昇降口前に張り出されていた。清水校長は，「この活動は 6 年生が中心になって計画を練り，応援の練習の日程を調整しています。5 年生は 6 年生の行動を見て，来年最年長になったときにしっかり行動できるようにしています」と言っていた。

## 4. 考察及び今後の課題

### (1) 学級会

学級会では以下の場面があった。司会進行から記録まで児童が行っていたが，活動が滞っていた。そこで教師から「何が大切な言葉なの？どれをキーワードにするの？」と助言が出た。すると意見が最終的には「諦めない」，「協力」2 つのアイデアにまとまった。

この場面は一見すると，教師の一言で意見がまとまったように映るかもしれない。しかし，児童は「この意見はどこと一緒のグループ？」と児童どうしで相談したり，役職の児童どうしで相談したりしていた。それができるのは，児童が教師の意見を自分事として捉えて活動しているからである。清水校長は，この自分事として捉えて行動することが児童の主体的に生き方を決めていく力につながっていると述べ，以下のとおり具体例を挙げて自己決定までのプロセスを説明している[5]。

例えば，食缶やお皿に食物が残っている写真を見せて，「これは何が原因だと思う？」と聞きます。子どもは「好き嫌いするから」「おしゃべりばかりしているから」「給食の準備が遅いから，最後まで食べられない」といった原因を考えます。次に，「どうしたらいいか」という解決策を皆で考えていきます。その解決策を踏まえ，では，あなたはどうしますかと聞き，自己決定を促します。

清水校長は，この過程を経るときの児童たちの気持ちを以下のように整理している[6]。

解決策を考えるときにすでに，食べ物を残さないようにしたいという暗黙の決定があり，そのために自分は何をするという自己決定があります。自分が決めたのだからその決定は自分の責任になり，「やらされている」という気持ちがないので，自分で進んで実行するようになります。自己決定を充実させて，自分が社会にそのように貢献していくかを考えさせることが重要なのです。そして，自分の行動が問題を解決していく体験を積ませます。子どもたちはその中から，主体的に生き方を決めていく力を付けていくのです。

学級会においては，自己決定をしていく場面が多くある。司会の活動の促し方，黒板の整理の仕方，司会のフォローの仕方，意見のまとめ方など小さな自己決定から，今回の議題にある，運動会で使う旗を決めるという大きな自己決定まで，さまざまな自己決定の場面がある。清水校長が述べていることを踏まえると，自己決定を行うためには，課題を自分事として捉えられるか否かが大きく影響していると言えよう。

実際の学級会では，学級の児童の全員が話し合いに参加している様子が見受けられた。発言者の意見に賛同するような発言や，付け足しのような発言など話を聞いていないとできない発言が多くあった。それに加えて，ある児童が発言に行き詰ってしまった際には，周りの児童から責められることはなかった。反対に，その意見が広がって旗に込める願いを決める決め手にもなった。このような場面が見受けられたのは，学級の一人ひとりが自分事として議題を捉えていたからであり，その結果，友達の意見も尊重する場面が見受けられたのではないかと考える。

### (2) 運動会の練習

運動会の練習でも学級会と同様，自分事として捉えさせる場面があった。人文字の練習中，教師が「それぞれの場所でそれぞれの課題があると思う。だから先生が『皆でこうしなさい』という指導はあまりできない」，「それ（各々の課題）をそこにいる人と考えなさい。相談しなさい。」と児童に伝えた場面がある。それによって児童たちの演技の工夫がより見受けられるようになったが，それは，児童が演技を自分事と捉えているからであると考える。

課題に児童が正対していることにより，どのグループでも先程までの演技での問題点を出し合い，解決策を提案している様子がうかがえた。さらに一部のグループでは相談している際に児童どうしでシミュレーションを行って，全体で練習する前に，提案した工夫が実際に問題点の解決になっているのかを検証していた。演技後には教師が「今の練習の工夫はどうだった」，「もう一度相談しよう」と児童に投げかけていたが，すでに，近くの児童どうしで改善の余地がないか話し合っていた。課題に対する改善案の出し合いの中で，「向かいのグループの工夫よかったね。ウチらもやってみよ」という発言があった。それに対して「これよかったよ。」と向かいのグループからが返ってきていた。教師が具体的に「〇〇のグループがよかったね」と言わなくても，児童どうしで自然と褒め合う環境があればいいことが，この場面を通して分かる。また，その環境下において，児童が自由な発想を生かしながら工夫を凝らす過程の中で，運動会の練習を通して，児童どうしの関係づくりにもつながっている。

### (3) 委員会活動

弐分方小学校では，休み時間を使って委員会活動の仕事を行う委員会がある。筆者らが見たのは環境美化委員会の仕事である。前日に全校児童で行われた運動場にある石を拾う活動で集まった石を集計する仕事を行っていた。環境美化委員の児童が集まって，班ごとの総重量を協力して計算する様子が見受けられた。休み時間には，友達と遊びたいと思う気持ちを抑えて委員会に来ている児童がいた。「遊べないって断ってきた」と言って，黙々と作業をしていた。なぜ，そのような姿勢が見られるのか。清水校長は，委員会のねらいは「本校の教育目標と同じように，『役に立つ喜

びを知る子』にしています」，「委員会のそれぞれの活動方法で，役に立つ喜びを知るようにすればやりがいがあります」と述べている[7]。

法務省茨城農芸学院（少年院）の森田祥一は，役割活動について以下のとおり述べている[8]。

この教育法の基本的な考え方は，基礎的生活集団の中に発生する多くの教育上の矛盾に着目し，この矛盾を解決する過程に集団成員を参加させ矛盾解決に取り組ませることが，成員一人ひとりの態度，行動を望ましい方向に変容することを促し，更には，過去に様々な影響を受けながら固定化した誤った考え方の習慣を変革し社会生活によりよく適応できる新しい心構えを獲得させることができるとすることにある。／したがって，この教育法は，基礎的生活集団という枠組の中ではあるが，実際の生活の場で生活そのもののあり方をどうするかを集団成員自らに考えさせ，実践させることを重視しているところに特色がある。

基礎的生活集団は，管理統制的レベル，準拠集団的レベル，自立的レベルの3つに分けられる[9]。弐分方小学校の委員会活動は，6年生が中心となって，いつ活動するのかを計画し，石の計測の際には，砂利を取り除いて石だけを計測するという基準を自ら設けている点や，計測ができるだけ滞らないように，自ら工夫して班の数字の小さい順に石の入った袋を並べている点から判断して，自主的レベルに該当する。これは「基礎的生活集団内部に発生する教育上の矛盾を集団成員自らが積極的に明らかにし，その矛盾を集団的なとりくみによって克服することのできるレベルである」[10]。

弐分方小学校では，自主的集団レベルの役割活動への参加体験を積み重ねることができており，それによって「役に立つ喜び」を理解しているのではないだろうか。また，これは学級経営にも大きく影響を与えると考えられるのではないだろうか。委員会という基礎的生活集団の場を委員会から学級に置き換えてみる。委員会での活動を学級で報告したり，学級の代表として委員会に報告したりする機会を設けると，委員会活動をするやりがいを児童なりに把握するだけではなく，学級の一員としての自覚という意識が生まれやすいのではないかと考える。

### (4) 縦割り班の導入

弐分方小学校では，学年の垣根を超えた交流をする機会がある。そこで縦割り班を活用している。清水校長によれば，弐分方小学校の縦割り班は「各学年を30班に分け，二つの班を1人の担当教員が指導」しており，「1班は各学年2〜3人ずつの約15人態勢」である[11]。弐分方小学校では毎週水曜日，朝の15分で遊び，毎月45分間の話し合い活動を行っている。縦割り班では6年生がリーダーを担当し，リーダー育成のためリーダー会議の場を設け，話し合い活動を使って1年生から6年生までが楽しく活動できるように工夫を出し合い，委員会でも縦割り班を活用するなどの試みを行っている。例えば，環境美化委員会が中心となって行った石を拾う活動を縦割り班ごとの集計で行ったり，運動会の競技に縦割り班対抗の競技を盛り込んだり，縦割り給食を実施したりするなど，弐分方小学校では学校のイベントのほとんどに縦割り班を盛り込んでいる。このことについて，清水校長は以下のように述べている[12]。

異年齢交流で，毎週遊んでいるから，子どもたち同士はとても仲良くなります。クラスの友達としか遊ばなかった子どもが，休み時間や放課後に自由にたてわり班で遊ぶようになりました。1年生と6年生が遊んでいると，2年生，3年生，4年生，5年生の子が自然に加わっていきます。

クラスでは友達と積極的にかかわろうとしない子が，実は面倒見がよかったり，クラスでは先頭に立って発表する方ではない子が，たてわり班ではリーダーになったりしています。子どものいろいろな面が見えてきて，今まで消極的な子が積極的に発言するようになり，自信がなかった子が胸を張って活動に参加するなど，「生きる力」を育むうえで効果がありました。

そして，一人ひとりの自尊感情が高まるものだから，つまらないいざこざが少なくなり，クラスの雰囲気もよくなりました。

6年生はクラスの友達がそれぞれの班のリーダーとしてがんばっている姿を見ることになり，「あいつがんばってる

な」と，相手を認める機会が増えてきます。実際にがんばっている姿を見れば，大人があれこれ言わなくても，お互いに尊敬するようになるのです。

### (5) 総括

自尊感情をもった児童の割合は，以下に挙げる平成24年度と平成26年度の弐分方小学校の全国学力・学習状況調査の比較結果で確認できる[13]。質問①「自分にはいいところがあると思う」に「当てはまる」，「どちらかといえば，当てはまる」，「どちらかといえば，当てはまらない」，「当てはまらない」のいずれかで答えてもらったところ，「当てはまる」又は「どちらかといえば，当てはまる」と肯定的に答えた児童の割合が，平成24年度の58.8%から平成26年度の86.0%に増加している。特に「当てはまる」と答えた児童の割合は，平成24年度の16.2%から平成26年度の42.1%に急増している。質問②「人の役に立つ人間になりたいと思う」にも同様に答えてもらったところ，「当てはまる」又は「どちらかといえば，当てはまる」と肯定的に答えた児童の割合は平成24年度の91.1%から平成26年度の98.2%に増加している。以上の論述によれば，弐分方小学校では創意工夫のある縦割り班の導入によって，子どもたちの中からこれまで見えてこなかった一面が見えてきたり，児童自身の自尊感情が高まってきたり，友達どうしで認め合う機会が自然と生まれたりしており，児童どうしの人間関係に大きく影響を及ぼしていると考えられる。

### (6) 今後の課題

ここまでの記述によってうかがわれるとおり，弐分方小学校では教科指導の場面でも特別活動の場面でも，児童の主体的な取り組みを促す工夫が随所になされており，その結果として，児童の自己肯定感や自己効力感が高まっていることが明らかになった。今後，こうした取り組みが他の地域でも，また，他の校種でも広まっていくようにアクティブ・ラーニングの研究を進め，発表していきたい。

## 謝辞

本稿は，2018年1月に高知大学教育学部に提出された坂本貴一の卒業論文「学級崩壊の立て直しと予防に関する一考察」（アドバイザー教員：加藤　誠之）の一部を抜粋したものである。本稿の公表については，現弐分方小学校長の御許可をいただいているので，記して感謝する。

## 注

[1] 清水弘美，『特別活動でみんなと創る楽しい学校』，小学館，2017，pp.4～5。
[2] 同上，p.96参照。
[3] 同上参照。
[4] 同上参照。
[5] 同上，pp.90～91。
[6] 同上，p.91。
[7] 同上，p.97参照。
[8] 森田祥一，「役割活動」（矯正協会編『矯正処遇技法ガイドブック<第2分冊>』，矯正協会，1991），pp.51～52。
[9] 同上，p.52参照。
[10] 同上。
[11] 清水，前掲書，p.67参照。
[12] 同上，pp.70～71。
[13] 同上，p.79。